

Lenfilm Retrospective

レンフィルム祭 — 映画の共和国へ



enfilm
Retrospective



レンフィルム祭

——映画の共和国へ

1992年 6月20日(土)／21日(日) 有楽町朝日ホール(千代田区有楽町2-5-1有楽町マリオン11F)
7月4日(土)→ 8月2日(日)毎週金、土、日曜 川崎市市民ミュージアム(川崎市中原区等々力3049-1)

主催 —— 川崎市市民ミュージアム、国際交流基金、朝日新聞社、(財)大阪国際交流センター

特別協力 —— レンフィルム

後援 —— 外務省

協賛 —— サントリー株式会社

協力 —— 、株式会社日本海

問い合わせ —— ☎044-754-4500 川崎市市民ミュージアム

合言葉は「レンフィルム」!

より多くの戦慄と大胆さと奇跡に立ち会うために

蓮實 重彦

「レンフィルム」は合言葉だ。何にもまして、人を戦慄へと誘う甘美な合言葉なのである。試みにその一語を口にしてみるがよい。「レンフィルム」と低くつぶやいただけで、誰もがたちどころに、70 数年に及ぶ映画史の最も貴重な瞬間に身を震わせて立ち会うことになるだろう。実際、1918年に設立されたこの撮影所は、FEKSの活動に代表される無声期以来、トーキー初期に第1回モスクワ映画祭でのグランプリを独占し、ハリウッドに対するニューヨーク派にも似た聡明なスタンスで、公式な表情をまとうモスフィルムへの距離を維持してきた。戦中から冷戦期の決して短くはない困難な時期をも耐えながら、やがて世界が注目するだろう瞬間の到来をじっと待ち続けていたのである。そして、その瞬間は訪れた。事実、1985年の民主化の翌朝から、カンヌが、ベルリンが、ロカルノが、ロッテルダムが、レニングラード派とも呼ぶべき作家たちの勇気と斬新さに戦慄したのであり、いま、その戦慄が日本に上陸しようとしている。

「レンフィルム」は、また、多様に偏心する大胆さへと人を導く合言葉でもあるだろう。事実、ソ連映画は暗くて教訓的だという固定したイメージを晴れやかに払拭し、パラジャーノフやタルコフスキーが決して例外ではなかったことを世界に向けて雄弁に表明しているのが、現代のレニングラード派の作家たちなのだ。投獄経験8年という56歳の「新人」カネフスキー、ロシアのサミュエル・フラーともいうべき孤高の活劇派アラノヴィッチ、夭折した感性豊かな女流作家アサーノフなどの傑作が、形式の冒険者ロゴシュキンや神秘主義者ロプシャンスキーの野心的な試みとともに一挙公開され、それに、世界的な重鎮ゲルマンや国際映画祭の寵児ともいうべき若いソクーロフの代表作までが上映される時、そこに出現するだろうものは、流派的結束を超えた誇らしげな大胆さであるはずだ。鮮やかな色彩と深いモノクロームのコントラスト、フィクションとドキュメンタリーの意表をついた対位法、文学的な発想と映画的な題材処理の大胆なコントラスト、少年たちの失意と大人たちの諦念との痛ましい行き違いなどが、「レンフィルム」の煽りたてる刺激のたぐい稀な大胆さをあらゆる人に納得させるだろう。

「レンフィルム」は、さらに、人を映画的な奇跡に立ち会わせしめる貴重な合言葉であることに注目されたい。「スタジオ・システム」はいたるところで崩壊したという映画史の常識にさからい、幾多の改組や再編を体験しつつも、緯度からいって世界の最北端に位置する本格的な撮影所として、ソ連崩壊などもとせ、いまなお旺盛な製作活動を展開しているのだから、「レンフィルム」はMGM だのパラマウントだのといったちやちやな撮影所とはわけが違う。ハリウッドのメジャー系撮影所のように、旧作の権利を売り払ったり、敷地を手放したり、日本企業に身売したりすることもなく、また日本のように配給会社に墮したりもせずに、創設以来の70年の歴史を生き、しかも新たな体質改善をおのれに課してさえる1992年の「レンフィルム」は、まさしく映画史に一度しかおこらない奇跡を体現している。

戦慄と大胆さと奇跡の合言葉としての「レンフィルム」が、いま、その相貌のほんの一端を垣間見させようとしている。断言しよう。邦画洋画を問わず、近年の映画がおさまりがちな退屈な安定と小心さと繰り返しの支配に誰もがうんざりしているとき、この合言葉は、あらゆる人に思いもかけぬ爽快な体験を約束するだろう。

(はすみしげひこ 映画評論家:本企画の上映作品を選定した。)